

建築家として活躍している人の多くが、大学生時代から、独立を考えていらっしゃると思います。でも僕は、独立とか建築家が夢とか、そういう風に考えて、生きてこなかったタイプです。子供の頃から建築に興味があった、という訳でもありません。もちろん、大学で建築を学び、面白いなとは思っていたけれど……でも、何かの取材の時にも言いましたが、学生時代の経験が建築家を志すルーツとなったかっていうと、そういう記憶はないんですよ。そもそも「建築家になろう」と意識したのが、32歳くらいです。はつきり覚えてはいませんが、自分で事務所をはじめたタイミングで、「ようやく意識を持った」という感じです。

何かにになりたい、という思いも特に

建築家になろうなんて、思っていなかった
きっかけはパークレーでの協働体験

なかったですね。ただ、その都度、一生懸命生きてきました。建築が学問として面白い、というのを感じていました。きっかけとして挙げるなら、大学院生の時にひと月ぐらい、サンフランシスコのパークレーにある大学へ、アーバンデザインのプログラムを学びに行かせてもらった事です。僕は「街」というプログラムで、ひとつの建物をどう設計するか、というテーマに向き合っていました。大学には色々な人がいて、パークレーの人やイタリアの人、コペンハーゲンの大学の人……その人たちと一緒に、会話しながら提案を作っていくんです。それは、これまで続けてきた、全部一人で決めて、一人で苦しんで、一人で徹夜して作る、みたいな時間とは全然違って「面白いな」

大学を出たあと、東京の組織設計事務所就職しました。建築観といううなもの、そもそももっていなかったし、独立したのもほぼ成り行き。そんな僕ですが、沖縄でレストラン設計の仕事に携わる機会があって、この経験が意識をがらりと変える大きな転機になりました。当時は下北沢に事務所が

沖縄の人との時間・体験を通じて
自分の仕事は場所をつくることだと認識

あったのですが、事務所で模型を作っていて、沖縄へ持参しプレゼンする、という仕事の進め方に違和感がありました。沖縄と本州では環境が違ったり、風景だっけってまったく別物。そこで、沖縄らしさを求め、現地でリサーチを重ねて、沖縄の資源である琉球石灰岩を、かつての沖縄の人たちのように関係者

と。みんなで話をして、みんなに「あつ、いいね、それは！」と意見を貰った作品を作っていく。それって「健全じゃないですか。今までやってきた建築は、自分の設計を正当化するためのもの。どうしたら作品を見た先生たちが「納得」するのか、という、いわば「説得」だったのに対して、パークレーでは「どう思う？」や「つぱり」「こっちの方が大事

だよな」って、話し合っていくやり方で説得じゃない「健全」な対話が気持ち良かったという。自分が全力を注ぐんだったら、こっちの方面が圧倒的にいいなって思いましたね。当時は気付かなかったけれど、今思えば「建築家でやっていこう」と思ったきっかけは、パークレーで過ごした時間の中にあつたのかもしれない。

現場の願いをしつかりと捉える。

「健全」な話し合いから生まれる「健全」な建築



山崎 健太郎

Kentaro YAMAZAKI

八千代市の老人デイサービスセンター「52間の縁側」で、2024年日本建築学会賞(作品)、2023年JIA日本建築大賞、2023年グッドデザイン大賞を受賞した山崎健太郎氏が考える、建築の役割とは

COM Vol.37



CONTENTS

Front Line ■ 建築家インタビュー
山崎 健太郎 2

Arrangement ■ 納入事例
パティナー大阪 8

Arrangement ■ 納入事例
PMO EX本町 10

Arrangement ■ 納入事例
天神ブリッククロス 12

News Topics ■ ニューストピックス
福島工場に太陽光発電設備を導入
グループ共通行動規範を新たに策定 14
Smart PS Closer
出庫後自動ドア閉 紹介

Information ■ COMプレゼント 16

みんなで積むという結論に至ったんです。沖縄のレストランには、やはり沖縄の資源が一番だと思ってたんですね。いざ沖縄でワークショップをやってみたら、3日間で60人くらいが集まってくれました。そうやって建築を一から作った経験が心に残り「建築ってすごい仕事だな」と。「建築を自分の仕事」だと認識したのは、沖縄の体験から。今まで自分が一生懸命勉強してきたことに、ちゃんと「意味」があるとかって。この業界には、自分がやるべきことが、確かにあると気付きました。ちょっと大げさかもしれないけれど、建築家が、現場にいる人たちの「願い」や「想い」をしつかり捉え、きちんと形にするのが仕事なんだって、心から感じた出来事です。



糸満漁民食堂 Photo：小出直穂子

「場所」に対するみんなの「想い」を 建築に込めて実現していく

沖縄で出会った人たちは、自分たちの郷土料理を伝承したいという、強い「想い」を抱えていました。そのためには、建築の力が必要だと。僕が沖縄に行くと、彼らはおじいさんやおばあさんの話をずっとするんです。自分たちが大事に残していきたい場所も、たくさん案内してくれました。沖縄の人たちはおじいさんやおばあさん、お父さん、お母さん、自分たちの子どもたち、そんな家族と過ごす時間の中で生きている。だからこそ、郷土料理を伝えていく店を作らなければ、自分たちの食文化が小さくなっていつてしまう。もしかすると消えてしまうかもしれない……そんな不安な気持ちがすごく強かったですね。たまたま出会った一部の人の考えかもしれないと興味を持ち、他の人にも聞いてみたんですが、決して偏った意見じゃなくて、周りにいる仲間も同じ気持ちを持っていました。さらに、「やるんだったら応援するよ」という、仲間がたくさんいた。この事実を知って、人の想いを大切に作る場所が必要なこと。場所を作るにあたって、どういう形状が適しているのか。その場所や形に意味を持たせられるのか、という部分が設計側の責任で



あると感じました。レストランへ琉球石灰岩を積んでもらうことについて、彼らがどういう風に反応するだろう、という点も気になっていました。現地に暮らす人たちが抱える場所に対しての想い、場所を「自分たちの言葉」で他の人に説明する力、伝える力がとても強かったです。彼らは、僕なんかよりよっぽど上手にしゃべるんですよ。「おじいさんの文化はこうで、使っている素材はこう」「だからこれをみんなで作っただけです」って感じですね。

この感覚は、パークレーで感じたような清々しさにつながっていて、健全な感じがしたんです。自然っていうのかな。すごくね、ここに全力を注ぎ込んでもいいんだって。頑張ってるべき価値ある仕事で、僕の体質には合っていると思っています。

どこからでも行き来できる 内でも外でもない境界があいまいな「52間の縁側」

コンセプト、と言っているのか分からないけれど、52間の縁側は、「安心して年を取っていただける地域社会が欲しい」という皆さんの、望みを叶える施設です。この想いを受けとめ、実現するには「縁側」のようにどこからでも入れ

る、内でも外でもない境界があいまいな建物の形がフィットするんじゃないかと考えて設計しました。ディスプレイの建物だけど、利用者さんだけでなく、その周囲、地域、世間、共同体、友だちや仲間、そういう人たちの気持ちも含

めた「安心して年を取れる地域社会が欲しい」という声を形にしています。まず敷地を見て、いろいろな人の声を聞いて。その上でコストと空間の大きさ、人が集まる場所と、ひとりで行かれる場所がうまく共存できる建物になるように考えました。その結果、子どもたちが勝手に来て宿題をしたり、認知症のおじいちゃんに声を掛けたり、不登校の子どもが自分からお皿を洗ったりして過ごす空間が生まれたと思っています。建築の力だけでは難しいけど、建築は環境の一部でもある。そこにいる人たちの雰囲気や場所が決

まるし、その人たちの気分や居心地の良さ、「ここはわたしたちの場所」だと思える気持ちは、建築の作り方にもちろん関係がある。だからこそ、僕は設計者として、願いや想いを乗せるさまざまな努力をしたつもりです。場所や利用する人の気持ちを大切に設計すると、彼らが持っている主体性なんかが出やすくなるし、使いやすくなる。建築はあくまでも総体の一部でしかないけれど、52間の縁側は、地域の皆さんが望む世界を実現できる建物になってきているのではないのでしょうか。

建築は環境の一部でしかない でも、環境が引き起こす「奇跡」もある

つい一昨日、すごく興味深い話を聞いたんです。「52間の縁側」の利用者さんは、介護保険法が適用される方が主なんです。世の中には介護保険が適用されない居場所のない人もいます。すよ。「縁側」がいいのは、そんな地域の中にいる、引きこもりの人や障がいのある人、そういう人たちも受け入れてある。ここに来たら何かしら仕事があるから、柱に防腐剤を塗ったり、お茶を

出したりして、役割を果たしてくれる。最初はぶつきたらばうで怖かった人が、「おまえ、休んでいけ」なんて言って、僕にお茶を出してくれるんですよ。

その中に、12年間ぐらい引きこもりで、障がいのある50代男性がいました。受け入れ先がないから、「縁側」でケアできるなら、そうしてほしいとケアマネージャーや行政側から依頼があつて。それで3ヶ月ほどいたそうです。体は



52間の縁側 Photo：黒住直臣



「福祉」というとつい「配慮」という解釈をしてしまう。でも、それは福祉という言葉に引っぱられてるんだと思います。僕らだって、普通に生きていますだけで、辛いことがいっぱいあります

人と人との関わりあいで生きる 人間同士の環境を整えるのが建築の役割

ち止まることが許されなかった。病院の廊下って、誰かが立ち止まっていたら邪魔ですからね。最後になるかもしれない親子の対面の場を想像して見た時、廊下はすごく残酷だと思いました。ホスピスだからこそ、もっとゆったりとした廊下スペースを取ってあげた方がいいし、病室まで足を運べない、立

ち止まりたいんだったら、ちよつと廊下で腰掛けて、自分の気持ちを整理したり、ちよつと窓の外を眺めてみたり。そんな環境を整えてあげるといいし、それぐらいなら設計者にもできる。いわゆる病院的な建物では、ゆつたりとした気持ちにはなれないし、やっぱり環境が大切だと思うんです。

よね。ごく普通の暮らしの中で、ですよ。これは福祉に限った話じゃなくて、日本人がこれからどうやって生きていくべきか、という話だと思います。どうやって年を取り、どうやって死んでいくのか。子どもたちとどう付きあっているのか。いわゆる共同体が失われる時代の中、それでも人との関わりあいの中で生きていくのが大切だっていう、それだけなんです。でも世の中には、関わり合いを感じられる環境が整っていないくて、ぜんぶ、自分たちだけで生きていかなければいけない場所ばかり。ここは制度の役割ではなく、建築の役割として、人間が望む環境を整えていくべきだと思います。

最後に機械式駐車場について

今、機械式駐車場に必要なのは、いかにコンパクトに、いかに高いクオリティで運営していくか、ということ。ここをきちんとやっていけば、価値につながるのではないかと思います。最近では、なんでもかんでもある種の多様性に配慮する、みたいな傾向があるけれど、機械式駐車場もその他の環境も、あまり行きすぎない方がいいのかなと。駐車場と言えば、低コストで、合理的で、都市から駐車場が見えなくなっていく、というのが最良。バリアフリー化の推進なんかは、もちろん必要だとは思いますが、これから進むべきは、たとえばスローに車椅子に乗った人がいたら、「ちよつと押しましようか」とか「ちよつと手を貸しましようか」と、誰もが声をかけ合える社会。設計や建築の力だけで解決するのではなく、環境から生まれる人同士の関わり合いがないと、この先厳しくなるのではないかと感じています。

P R O F I L E

山崎 健太郎 Kentaro YAMAZAKI

1976年、千葉県生まれ。2002年、工学院大学大学院工学研究課建築学専攻修士課程修了。2002年、株式会社入江三宅設計事務所。2008年、山崎健太郎デザインワークショップ設立。2024年、工学院大学建築学部教授。

主な受賞

2013年、グッドデザイン賞。2015年、日本建築学会作品選集新人賞（糸満漁民食堂）、日本建築家協会優秀建築選（はくすい保育園）。2017年、iF DESIGN AWARD Gold。2021年、日本建築家協会JIA優秀建築賞（新富士のホスピス）。2023年、グッドデザイン大賞、JIA日本建築大賞。2024年、日本建築学会賞（作品）受賞（八千代市の老人デイサービスセンター「52間の縁側」）。



動くから、食器を洗ったり、ご飯を出したり、掃除したり、いろいろなお手伝いをしてくれたそう。でもある日突然、「今月には行けなくなりました」と。理由を聞いたら彼、介護の勉強を始めたっていうんです。12年間引きこもっていた人が、3ヶ月間「縁側」で過ごしたのをきっかけに、介護の勉強のために千葉へ通いだしたと。すごい。そんなことが起こるんだって驚いたし、感動しました。環境が変わるだけで、こんな信じられないことが起きるんですね。でも残念ながら、自分の居場所が、地域社会の中にない場合もある。今行政がやっている「制度」と「場所」があればどうにかなる、という考えは、設計者としてあまり信用していない。人って変わるから。本当に必要なのは、周りの人が好きでも嫌いでも、一緒にいられる環境なんですよ。そのためには、設計や建築の力を生かした工夫も必要。人の変化が起きるのは「環境」だと思っています。「建築だ」なんて思っていないです。でも、この嬉しい話を聞いて、建築は環境の一部だし、その場所を利用する人たちのたくましさとか明るさとか、さまざまな人たちが無理なく同じ空間に一緒にいられるかどうか、という点で、建物の力が役立ったのかなと感じています。

亡くなるはずの300名が260名に 雑木の庭を感じられる環境のホスピス

「52間の縁側」の前に、「新富士のホスピス」を設計しました。ホスピスもデイサービスと同様に、どうやって設計すればいいのか、考えるのが難しい建物のひとつです。亡くなっていく人の環境、終の住処を考えるのだから……。結局、病室に対して何か意図した設計を提案する、ということとはしなかったし、しないほうがいいと僕は思っています。だけど、一般的な、いわゆる中廊下があつて両側に居室があるような、病院形式の建築は絶対止めるべきだと思っています。ここには廊下ではなく、回廊と呼んでいる幅の広い廊下と庭が一体になるような建物を提案しました。

「新富士のホスピス」ができあがつて、ちょうど2年目ぐらいかな。ここでは、2年で300人ぐらいを看取る予定でした。患者さんの平均滞在期間がだいたい2カ月ぐらいで、最後は末期ガンで亡くなる場所です。ところが実際は、300人を看取るはずだったのに、40人ぐらいが亡くならず、自宅に帰ったんだそうです。もちろん、ここで死にたくないからと、帰った方の中にはい

ると思います。でも事実、40人が亡くならずに、一度は自宅へ帰ることができた。このホスピスには、敷地内に立派な雑木林があつて、ここを意図して残した設計としています。庭に面したダイニングテーブルで、ご飯が食べられるようになった。家族や友人たちが訪れやすい。ベッドをテラスに出して庭を感じられる。そんな、以前のような生活に近い環境で過ごせたという事が、良い影響をもたらしたのかもしれないですね。「生きる」って複雑で、設計や建築が未来へどんな影響を及ぼすかは想像できない。でも、人の幸せには、環境が大きな影響を与えている



新富士のホスピス Photo：黒住直臣

と思います。その他の要因ももちろんあるけれど、環境が違うだけで家族が頻繁に訪れたり、病院で掛けられる言葉も変わる、そんな変化が生まれると思うんです。

これは聞いた話ですが、娘さんがホスピスで過ごすお父さんに会いに行き、廊下でどういう言葉を掛けようかと、言葉を整理していたという話です。でも、幅1.8メートルの廊下は、ゆっくり立